

同志社生活の思い出



磯部敏郎

また英語のよい学校として有名なものであった。

そこで私がまず驚いたのは生徒の出席が毎朝のチャペルの出席でまきまることであった。多分教室での出席はとられなかったと思う。チャペルの出席が教室の出席より大切であったのである。教室より礼拝の方が重んぜられたのである。基督教の徳育が同志社の生命であったのである。

私が同志社神学校に入學したのは明治三十七年の春であった。古い話である。官学の生活をしておった私には全く別天地に来たような感じであった。

その頃、同志社は世間から基督教の学校、

それから特別感動を覚えたのは金曜日の祈禱会であった。先生を初め生徒が多数出席した。しかし殊に生徒の有志が立っておおいに感話をしたものである。私は今でも記憶にのこっているものがあ

る。その一つに、その頃、大塚元総長が中学生であったかと思うが、ある金曜日の祈禱会で「人間の道徳性」には「リミット」がある。善をなさんとすれどもそれをなし得ない。人間性にはそのリミットがある。これを打破して善を行わしめるものは信仰である。神の力である云々。私は今でもその「リミット」の一言が力づくよく心にのこっている。その感動を忘れない。いかにも同志社の生徒は精神的修養におおいにつとめておったのである。恐らく大塚君の今日あるゆえんはその頃の賜物であったのであろう。

*

次に思い出の一つは英語の勉強に熱心であったことである。それは先生も生徒もおおいにつとめたことである。それは同志社の面目にかかることと思うたのであろう。

今泉真幸先生は旧約の歴史の先生であった。しかし英語の訳読では同志社随一であった。もともと漢学の素養が深かったためであった。だからその訳読は簡明適確であった。先生は神学生の有志のために有名な英国の文豪リットン卿の「ラスト・デー・ポンペイ」の訳読会をせられておった。そうして和文の

大家三輪源造先生が陪席せられて文学的批評を加えられた。まことに有益熱心なものであった。これ等も他の学校でみられぬ先生方の課外の熱心な指導であったと思つた。

このことは先生方ばかりでなかった。生徒自身もまたこれをつとめた。西寮の寮長に岸田美郎という英語の出来る方がおつた。寮の有志のために自室で当時有名であつた米国のスミス博士の「クリスチャン・エッセイクス」五百頁くらいの大冊を輪読しておおいに読書力の養成につとめたものである。

これらのことは皆な同志社の学生は英語の力を充分に身につければ世間を偽(いつはり)むることになると思う自責の精神から出たものであつた。「基督教と英語」それは同志社の特色で、これを身につけることはその責任であると思つておつたのである。学生も先生も同じ思いをもつてそれぞれ自発的につとめ励んで学校生活を十分に楽しんだのである。

*

更に同志社生活で忘れることの出来ぬものは先生と学生との人格的接(つ)触(ふ)である。その感化である。基督教の人格の麗(うつく)しさを肌(はだ)で学んだことである。

私は幸いにもラルネデ先生に一番親しく接する機会を与えられた。それは偶然にも私が先生の奥様が校長であつた今出川日曜学校の先生をしておつたからである。それがためにしばしば先生の自宅に来る機会が与えられたのである。

それは私が盲腸炎で大学病院に入院していつとまのときのことである。先生は二、三度寒い雪の日に見舞いにこられたことがある。ほんの二、三分黙々として枕辺に立ち一言二言独語のごとく何か問われて最後にポケットからほんとは菓子一つか又は果物一つをとり出し、枕頭において帰るのである。しかしその温情は今なお私の心に深くのこっている。多くの人から沢山の御見舞いを貰つたが、その人のこともこの見舞品もみな忘れたのである。しかし先生の菓子一個、果物一個は今なお心にのこっている。やはり人格のあるべきものの尊(た)びさである。

先生が一年の休暇を得て米国へ帰られる時のことである。私は先生の玄関に御見送りの挨拶(あいさつ)にいった。玄関までおりてこられた先生はその胸にさしておられた「スマイル」の束(たば)の半分を分けて私に下さつた。私はその瞬間(とき)に

あの仙人のような、同志社の彰栄館の時計よりも正確無比、同志社のカントと言われている先生にこんな優美な表情が愛情がどうしてあるかとほんとに驚きまた深い感動に打たれたものである。これもまた私の一生を通してのこされしあるべきものの人格の感化である思い出である。

ある時、私は先生の書齋で先生に一番愛読せらるる本は何ですかとおたずねしたら先生は言下にそれは「シエキスビヤー」と一言いわれた。先生の人間性のあるべき真の姿にふれたと思つた。先生は単なる神学者でなかつたのである。仙人ではなかつたのである。深い人間の理解者、愛情のゆたかな人であつたのである。福音のあるべき真の究極の境地に徹したクリスチャンであつたのである。かかる先生の人格の感化を肌で受けることの出来たのは何よりも大きな同志社生活の賜物であつた。誠に同志社はかかる尊(た)び賜物を私達に与えてくれたのである。これが私の昔の同志社生活の思い出である。

(明44神別卒・教師)

新島先生最後の地に始まった仕事

尾崎憲治

神奈川県大磯町は、相模湾沿いの海岸中央に位する小さな田舎町ながら、明治以来の歴史的人物によって名高いところである。伊藤博文邸・岩崎弥太郎邸・吉田茂邸等があるが、同志社人にとって忘れることのできないのは新島先生終焉の地ということである。町の中央・国道一号線のわきに石碑が立っているが、ほとんど誰れの目にもとまらぬ目だたぬ存在となっている。町長や助役はそれをなげき小生にうったえ、同志社が力をかしてその石碑に日が当るようになればと願っておられる有り様である。

この大磯町の西はづれに近く、隣接の二宮町に続く海岸にしゃれた四階建の大磯アカデミー・ハウスがある。相模湾を一望に収め、西に伊豆半島、東に三浦半島を、また南の正

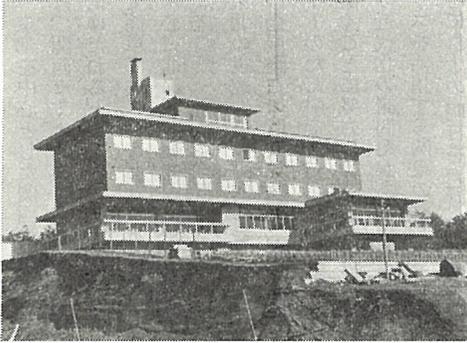
面海上に白煙をあげている大島を望見するところが出来る。東海道線で二宮駅から大磯駅に向うとき、海岸に大磯ロングビーチの大きなネオンが目立ち白いホテルの建物が見えるが、その西側にこんもりと繁る松林があつてよく注意するとアカデミー・ハウスの屋上が見られる。大磯アカデミー・ハウスは昭和三十八年十月に建てられたが、アカデミー運動のアジアにおける初穂である。

*

アカデミー運動というのはその起源を戦後の西ドイツに発する教会の一つの働きである。一九四五年敗戦後荒廃した西ドイツに教会が手をつけた三つの大きな働きがあつた。第一はシュトゥットガルト罪責宣言といわれるすぐれて神学的な労作である。第二は極めて

実際のなもので、組織的かつ、大がかりにはじめられ実行に移された救援事業で、戦災者や引揚者に住宅・食料・衣料等をあつせん配分した。第三がアカデミー運動で一口に言うなれば「話し合い」運動である。今日ではちよつと合言葉のように「話し合い」ということが、安易に人々の口にのぼるようになったがアカデミー運動の場合、静かな美しい環境に身を移して何泊か寝食を共にしながら、現代人に共通のしかも重要な問題について事実を指すものである。この運動の初期にあつては、教会から遠ざかった人々を再び教会に結びつける意図もない訳ではなかったが、次第に教会という一つの組織を強化するためのものではないうことがはっきりしてきた。すなわち、この運動を実際に推進すればするほどはつきりしてきたことだが、現実の社会の矛盾・問題点から目をそらさず、むしろそれらに向つて誠意ある事実を則した解決への努力を惜しまぬ態度とその実現への行動ないしプログラムの中に「宣教」の一側面を発見したと言ひ得よう。新島先生のいわゆる「良心を手腕に運用する」ことを現代的な機構と

推移の中で実現しようとするのである。したがって、この運動は教会の用語で言えば一つの信徒運動であるが、狭義の教会内における信徒のための運動ではなく、信仰の有無や相違、主義主張を超え、対話を可能ならしめる努力を通じて現代社会の動脈硬化ないし分裂症的傾向を予防し、新陳代謝を促進しようとする運動である。そして、その運動の原動力としてキリスト者が奉仕しようというのである。



大磯アカデミーハウス全景

現代社会の進展に伴ってキリスト教を含む宗教一般は益々そのグロテスクな姿をあらわにする。逆に言えば、宗教はその存在理由を問いつめられ、早晚その生死の判決をうけねばならない時がくる。河の本流にさからう側流のように、往々にして信仰復興の動き、ある種の宗教の繁昌ということもあるが、もはや現在のままの形態で留まることはゆるされまい。寺院や教会という「場」の宗教から腕皮して、俗に言う「在家の宗教」であらねばならない。「在家の宗教」といつてもそれは在来の宗教を家庭内にもちこむことでも、信徒が僧侶や宣教師の真似事をするのでもない。或はまたそろいのユニフォームを着用しただけのほりを立てて動き廻ったり、同信の輩を獲得するために他人を口説き落す努力をすることもでない。ここで言う「在家の宗教」とは、進歩しつつある技術社会の中の自己の在り方を問いかつ問われることである。それは一方では、死んだはずだがまだ生きている神々ー固定化した先入観におかされた機構またはイデオロギー集団ーを否定する作用をもつと同時に、他方では、実はそこに生々と生きてゐるのに、死んだも同然に無視されてい

る神々人間集団に生々とした人間らしさをよみがえらせる公分母のような機能をもった真実ーを再発見することである。

従って、ここでいう「在家の宗教」はあらゆる人々に共鳴と協力を呼びさましていく類いの運動として進展しなければならぬ。しかも、同じ宗旨の者にのみ共通する運動ではなく、宗教なしにでも不自由を感じない人々ですら共感する運動であって、その運動の眼目は、他人の立場を顧慮することを促すものである。

*

わが国におけるアカデミー運動は、故杉山元治郎氏はじめ数名の有志によって約十年前に紹介され、昭和三十六年五月文部省認可による財団法人として組織化された。その後内外の協力を得て、京都修学院と前記大磯に土地を獲得し、同三十八年十月大磯にモダンな宿泊設備をもった「話し合いの家」が建設されるに至った。運動としての「話し合い」の集会は、東京を中心とした関東地区・京都を中心とした関西地区・仙台を中心とした北日本地区・また札幌に北海道地区と、それぞれ地方の特色を生かしながら展開されて今日

に至っている。

京都を中心とした関西地区の働きについては、関西セミナー・ハウスの村山所長の紹介にゆだねるとして、ここでは他の地区について簡単に述べることとする。札幌では酪農を中心に北海道開発問題に重点を置く。仙台では宮城県・福島県にわたって、農業を中心に東北の後進性を多角的にとりあげる。千葉では発展途上の巨大な京葉工業地帯のコンビナートのただ中で最先端をいく産業の諸問題を衝くことに努力している。長野では信州一円の近代化の諸問題がある。そして、大磯のハウスを活用する関東のグループは、東京を中心に日本の明日を左右する政治・経済・労働・教育・科学・社会の重要な諸問題を取り上げ、年間を通じ、平均週一回の宿泊を伴う「話し合い」の会を開催してきた。

* —

小生は数年間にわたる滞欧生活ののち、昭和四十一年五月家族を伴って帰国し、大磯アカデミー・ハウスの所長に就任し、ハウスの運営と共に、右にあげた集会の計画実行に他の一人の同僚と当っており、最近では財団法人の事務局長をも代行している。欧州の各国に

発展し活発な活動がなされている彼の地のアカデミーをつぶさに見る機会を得、アジア、特に日本のアカデミーと比較して考えるところがある。そしてそれはアカデミー運動の目指すところのものを明示すると思うのである。

技術文明の圧倒的な発達とはヨーロッパにおけるキリスト教精神文化を一見ほとんど稀薄化していくような印象を旅行者に与えるのであるが、そこに住みついて見ると日本人（東洋人）とは極めて異質な精神文化が人々の日常生活の中に完全に融合して生きているのを驚きの目で発見することが出来る。それはもはや教会のものではなくなっただけで、キリスト教の本質から由来したもので、換言すればキリスト教的なものである。これを今一度教会の所有だと宣言しようとするのではなく、或は、これをことさらにキリスト教的なものだと思わせようとするのもない。むしろ逆に、それを、ともすれば社会生活の流れに消え去ろうとする傾向の中で、われわれ人間に共通のもの、今日の社会になくならぬものとして再び意識のなかに呼び戻そうとする努力がアカデミーの運動であろう。この点からしてわが国におけるアカデミー連

動の立場を考えてみよう。精神文化の面ではヨーロッパとは全く異った土壌の上に、ヨーロッパと全く同じ技術文明が覆い、その表面は日進月歩の目まぐるしい変化改革が間断なく続いている。わが国キリスト教陣営に属する多くの人々と共に、国粹主義に立つ多くの人々もまた、この表層的西欧化を嘆いている。しかしそれらは共に偏狭な立場であって、むしろ歴史的必然性に促されて技術機械化の進行する社会を現実として受容し正視しなければならぬ。そしてその全く異質な土壌の中にもまた、明日の社会にとって無くてはならぬものの現代を生きるわれわれに共通の大切なものが秘められていることに気付くのである。それは或はヨーロッパの古い太い根に比較して毛根のようなものであるとしても、また日本の変形変色をうけたものであるとしても、それらを現代人に共通のものとして取り上げ受け容れていく努力の一助としてアカデミー運動がある。日本クリスチャン・アカデミーは、教会人だけの、また教会人のためだけのものではない。アカデミーの仕事にたずさわる者はかの西欧の土壌に秘められた養分の存在を知る者として、表面から

近代化された日本の土壌にもそれと類似ないし同質のもの存在を窺見する務めを負うの

京都のアカデミー

である。

(昭29大院神卒・大磯アカデミーハウス所長)

村山盛敦

北に修学院離宮、南に曼殊院、東北に比叡山を望む景勝の地に昨年、財団法人日本クリスチャンアカデミー、関西セミナーハウスが建てられた。アカデミーの創立者ミューラー博士をはじめ安西正夫昭和電工社長、クラップフドイト大使、秦孝治郎同志社理事長ら内外より多数の出席者を迎え、十月二十日に開所式が行なわれた。このために、はるばるドイツより駆けつけられたミューラー博士は、ゴツホの「はね橋」の絵を記念として贈られ、メッセージの冒頭で次のように語られた。

「エヴァンゲイリッシュ・アカデミー二十年の歴史を通じて、私共はくりかえし、アカデミーの仕事象徴するシンボルには何がよい

かと考えてまいりました。はじめは、話し合いの行なわれるホールをシンボルにつかいました。そのホールは、古代ギリシャのいわば「話し合いの文化」の誕生の場となったソクラテスのアカデミーを思いおこせようとしたのであります。次には橋をシンボルといたしました。アカデミーが、時とともに、対立する意見をもった現在人の相互理解促進の場として成長したからであります。やがて輪の形をシンボルとして用いました。現代社会の決定的に重要な問題が、孤独とおのれを正しとする独善の精神から人々を解きはなち、人間的な共同体のサークルに導き入れうるか、否かにかかっているからであります。い

ずれにいたしましたも、人々の相互理解といふことが、エヴァンゲイリッシュ・アカデミーの中心的な課題なのであります。」

出席者一同は新装なったハウスを眺めながら、アカデミーの本格的な運動がこのハウスを中心にはじめられることに深い喜びを感じ、あらためて使命の重大さを自覚したことであった。

*

アカデミー運動の日本への紹介は、ス・チューリッヒ大学神学部教授、エミール・ブルンナー博士によってなされた。昭和二十四年十一月、同志社有隣館大教室で「技術と宗教」と題して講演された時の印象を今も忘れることはできない。講演後、質問懇談会に出席された博士は、書物や写真で考えていたよりもズット親しみやすい好紳士で、学生から飛び出した無茶な質問に対しても、丁寧、適切、しかも明確に答えられたのには深い感銘を受けた。博士は昭和二十三年と二十七年、YMCA、国際基督教大学から招かれて来日され、講義講演のかたわら各地を巡って、職種別話し合いの会合を提唱し、特に東京地区では学者・実業家・政治家・労働者等

の会合が持たれていった。

昭和三十三年、ヨーロッパ・アカデミー指導者会議はベルリン・アカデミー所長アルフレッド・シュミット博士を日本に派遣し、その足場をブルナー博士のグループに置いて地道な活動を続けた。その頃、シュミット博士招聘に努力された伊藤規矩治教授(文学部)を中心に、嶋田啓一郎教授(文学部)、竹中正夫教授(神学部)、小宮孝教授(関西学院々長)、松村克己教授(関学神学部)が関西運営委員会を組織し、嶋田教授を委員長として、いち

はやく関西における活動を開始した。昭和三十五年五月二十一日より二十二日にかけて、大津のさざなみ荘を会場に公立高校教師のターゲングが「教育と地域社会」の主題のもとに、神戸大学塩尻公明教授を講師としてはじめて開かれた。次いで昭和三十六年二月十六日より十八日にかけての三日間、宇多野ユースホステルを会場に藤井大丸ターゲングが開かれ、会社側五名、組合側二十七名、アカデミー八名の参加があった。「あたらしい労使関係——職場の幸福を求めて——を主題に小宮孝教授が講師となり、運営委員総出でこれにあたった。このターゲングのためには

伊藤、竹中両教授が藤井正三会長を訪問し、その後重役会で説明し、一方、労働組合事務所を訪れてアカデミーの主旨を伝えるといった陰の努力があった。案内のことばには「生きものは分解できない」という呼びかけで、次のような文章が記されている。

「現代は科学と技術の時代だといわれます。科学と技術のなかつた世界を想像すると、この言葉の意味はよくわかります。科学は、ものごとを細かく分け、いろいろな科目にかけて研究する学問だから科学というのです。……人間のこともよく理解するためには、一

度は科学的に分析する必要があります。しかし、それもただ考える場合のことであつて本当にバラバラにしたら、人間は死んでしまいます。人間の集まつてつくる社会についても同じことがいえます。一〇〇年まえに多くの部屋にわけて、それを不便な廊下でつないだ家が、今では再びもっと有機的に活用出来る家に変りつつあるように、わたしたちの社会も、都市も、会社も、考えなおすべき時が来ているようです……。」

前記のターゲングをはじめとして、その後学生・医師・ジャーナリスト・ホワイトカラー

1・芸術家・諸宗教指導者等の会合が定期的

に開かれていった。特に関西労伝で活躍している金井愛明・平田哲・小柳伸顕諸氏(いずれも同志社出身者)の協力を得て労働組合指導者のターゲングを持つことができたのは一つの特徴である。

幸い昭和三十七年に日本家屋、能舞台、茶室、日本庭園を有する約二千坪の土地を野田鎮五郎氏より譲り受け、今日の新ハウス建設を夢みながら、ささやかな活動を続けて来た。参加者多数のために隣りの曼殊院門跡山口光円氏の協力を得て、竹の間等でかりの宿を乞うたことも今ではなつかしい思い出である。

*
*

ハウスの建築設計は、京都大学増田友也教授の指導の下にあるゲンプラン設計事務所の高多村幸夫氏によってなされ、大成建設がこれを請負った。一〇〇名を収容する会議場の他、二つの小集会室、食堂、浴室があり、十二の各客室には、バスまたはシャワー・トイレが備えられ、六十一名が宿泊できる。会議室の後には同時通訳室があり、すでに数回の国際会議に利用した。ロビー、小会議室食



関西セミナーハウス前庭で一尾崎氏（左）と村山氏

堂等の壁には、田中忠雄氏をはじめジャック・ヴィヨン、森田子竜、掛井五郎の諸氏その他十五名ばかりの画家・書家・彫刻家の力作が掛けられ、人々の目を楽しませてくれる。

建築資金は、約一億五千万円で、日本船舶振興会三五〇〇万円、ドイツ教会三六〇〇万円アメリカ、カナダ教会二〇〇〇万円の援助の他は、関西財界約六〇〇〇万円を募金目標に、松原与三松氏、松下孝之助氏らが中心となっ

て今なお努力中である。オープン直前に住之江産業よりロビー、会議室のジュートランを、川島甚兵衛氏より全館のガラスをおおうカーテンを、またその後、千宗室氏、十字屋楽器店よりグランドピアノが寄贈された。

*

アカデミーの本格的な働きは、今からである。「天が下のすべての事には季節があり、すべてのわざには時がある」（伝道の書三章一節）と言われるが、まさに時満ちてハウス建設がなされた。すべての力がこの時、ここに結集した事実の奥に、大きな力が働いていることを、ひしひしと感ずる。あらゆる異った賜物を持った者が共同して、一つになる時、そこには人間の思いを越えた新しい世界が生まれる。この体験と確信がなお一層今後の働きに大きな希望を与えてくれる。参考までに最近のターゲングを紹介しよう。

◎ 医師ターゲング（六月）

主題「医師の養成の問題点

—登録医制をめぐって—

登題者 大阪大学助教授 中川 米造氏

京都府医師会理事 横村庄一郎氏

青医連京大支部委員長 田原 明夫氏

◎ 藤井大丸労働組合ターゲング（六月）

主題「労働協約について」

講師 同志社大学教授 角田 豊氏

◎ 高校教師ターゲング（六月）

主題「高校教育の壁」

講師 千吉株式会社社長 西村大治郎氏

◎ 学生問題ターゲング（七月）

主題「今日の学生問題」

講師 関学大教授 塩原 勉氏

私は、いまハウスのテラスから京都の町を見おろし、また周囲の山々を仰ぎながら、今は亡き大下角一先生の声を思い出している。渡独の際、お別れのあいさつに行った私の手をにぎって、病床の中から「君、日本のキリスト教のために、徹底的に働いてくれ給え。」と励まして下さった言葉は、今も忘れることができない。働いているのは決して私一人ではなく、多くの人々の励ましと支えによっていることを、しみじみと思わしめられているからである。

この運動が一日も早く日本の社会に根をおろし何時の日か実を結ぶようになることを願っているものである。

（昭28大院神卒・関西セミナーハウス所長）

平安教会の創立時代

小野 一郎



ひっくりかえしているうちに幸運にもこの原資料らしきものに行き当たったのである。

この原資料ともいうべきものは一冊の和綴のけい紙綴りである。当時のノートというべきであろうか。その表紙はほとんど黒に近いなす紺色で、表紙にふくらみとやわらかさをもたせるためにうすくのばされた綿が入れられ、加工されている。綿いれ表紙というべきであろうか。これも非常に興味あることである。

日本基督教団年鑑によると日本基督教団平安教会(京都市中京区烏丸通三条上る)は明治九年十二月十日を創立記念日としている。同志社教会の創立は明治九年十二月二日となっているので、平安教会は同志社におくれること八日、京都での第二番に古い教会ということになる。

それでは、平安教会はどのような事情で創立されたのであろうか。これは京都におけるキリスト教伝道史の問題としても非常に興味あることであり、また重要なことでもある。この問題を解明するための資料としては大正十五年十二月に当時の平安教会牧師山口金作先生(第七代牧師)の編集になる「平安基督

教会略史」(B6判一〇四ページのもの)がある。しかし、これはその緒言にもあるように、「是は只五十年間(当時が平安教会創立五十周年の頃であった)の歴史の骨子に過ぎぬ」ため、記述も簡条書きになっており、生き生きした創立当時の模様を伝えることにはずこし不十分なものである。従ってわたしたちはこの記述の原資料というべきものにさかのぼらざるを得ないわけである。

このような事情からわたしは平安教会創立時代の原資料に大きな興味と必要を痛感しつつ、四月末のある日の午後、平安教会の古書類が山積みになっている倉庫(教会堂の四階)にはいり、ほこりまみれの書類をあちこちと

さて、この表紙を開くと、写真のように、表紙裏には三行で西京府東竹屋町耶蘇公会史と記されている。一行目の西京府の下に「第三新町教会ト改名」という文字がある。新町に教会が移転したのは、明治十年九月ということが第二公会記録に記されていることから、この表紙裏の文字は明治十年九月以降のものであると推定される。

さらに、本文の第一ページ(写真参照)から九ページまで表紙裏と同一者の筆蹟で、明治十年五月二十五日までの記録が記されている。このようなことから推定して、この原資料は教会が新町に移転して間もなく、創立の明治九年十二月から翌明治十年五月下旬まで

のことをひとりの記録者が記し、そのあとの明治十年六月六日以降の記録はいろいろな人によって記されている。それらの筆跡はあるものは几帳面に、あるものはやや乱暴に、あるものは楷書、あるものは草書といった具合に非常に変化に富んでいる。そしてこの記録

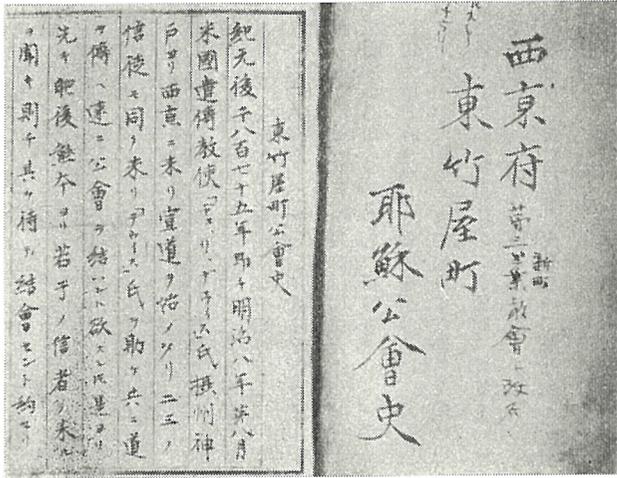
は次のような文章によって、まだ三分の二以上もノートの紙が残っているにもかかわらず中斷している。すなわち、「明治十六年一月八日より一月の間第二教会堂に於て万国共同祈禱会を開きたり」というのが最後の文章である。

東竹屋町公会史

紀元後千八百七十五年、すなわち、明治八年第八月、米國遣伝教師「J・D・デビス」氏撰州神戸より西京にきたり、宣道をはじめたり。二、三の信徒も同じく来り「デビス」氏を助け、共に道を伝え、すみやかに公会を結ばんと欲すれども、これよりさき肥後熊本より若干の信者来るを聞き、すなわちそれ待ちて結会せんと約せり。

千八百七十六年九月にいたり、熊本本の信徒も来り、かつ当地において若干信徒の加わりしをもつて、はじめて京地に三カ所に公会を開きたり。その第三を東竹屋町公会とす。この会員二十名にして、そのうち神戸より来りしもの二名、函館より一名、熊本より九名、新たに「バプテスマ」を受けしものは八名なり。新島氏これを司どり、新しき八名の信徒に「バプテスマ」の聖礼を行なえり。実に、明治九年第十二月十日、安息日なりし。

同十五日金曜日夜、公会に兄弟集り、会中



の役員を選ぶに決議し、公会主意書に基づき入札の多少によりて定めたり。六ヵ月を期して先ず仮牧師を選ぶに本間重慶入札の多きを以てすなわちその任に充つ。次に長老を選びしに海老名喜三郎その任に充つ。次に執事を選びしに横山田造入札多し。ゆえに横山氏に依頼するに氏は事故あるをもってこれを承諾せざりし。会員もその真実あるを知りてこれを諍す。同夜「ドーン」氏に依頼し暫時公会の助とせり。けだし公会牧師はいまだその真実を明らかに知らざるをもってなり。

次に金曜日夜再会して執事を選びしに、森田久万人その入札の多きによりすなわちその任に備わりて右長老執事の二員暫時一年をもって満期とす。その後金曜日夜を以て公会記念会日とし、また月曜日夜をもって尋問会と定めり。

同年十二月十六日、西京の三公会親睦会をなさんと決し、神戸、兵庫、三田、大阪、四公会の兄弟に報ず。よって、本日十六日かの四会より二、三名宛来会し、第一に主に祈念し、次に晩餐の聖札を守りて祝してその会をわかれたり。

その後、日ならずして大阪において沢山氏

牧師となれり。よって、神戸、兵庫、三田、西京、諸兄来会し、その儀を祝せり。時に東竹屋町公会よりは本間、森田を遣わせり。

明治十年三月休校中、本間は伊勢へ、小崎は彦根へ、林は奈良へ、吉村、崎田、吉田の三名は大津へ宣道せり。

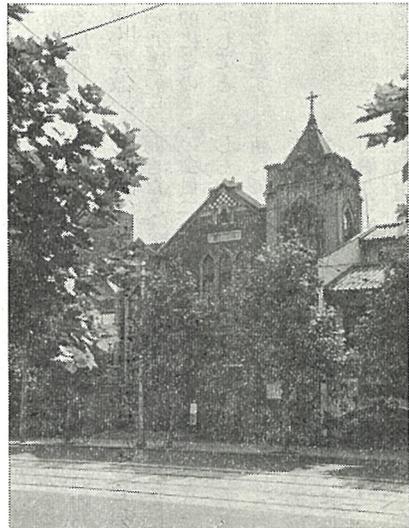
寺田祥安入会前すこぶる信仰の心あるを見うけ聖札をこうむらしめ入会を許せしといえども、その後会員たるべきの所業なきのみならず、ことに基督より遠ざかりたるよう兄弟一同見うけしをもって、第四月二十七日金曜日夜、退会せしむることに決議したり。

さらに五月四日、十一日の記録があり、五月十八日の夜の記録には次のように記されている。

「五月十八日夜、我輩公会を遷すことを議しかつ公会を維持せんためのおの若干金を毎月寄附することを約せり。」

*

このように記録は続くが、紙面の都合でこ



平安教会の外観

れ以上の引用を省略せざるを得ない。しかしわたしたちはこれら引用文によって、いまから九十二年前の信徒たちのこころ意気を知ることができるし、さらに、初期の教会が会議制に従って、たとえ小グループであっても、規約に従った整然たる教会運営を志している姿、また、伝道への熱意、不徹底さをゆるさない厳格な信徒訓練の姿等を知ることができ。また、各地に創立された諸教会とともに一つの信仰のもとにある共同体をつねに意識しながら、共同のたたかいをすすめていこうとする姿勢、あるいは献金をささげて、教会

の維持のために努力しようとする姿勢等も、
 非常に新鮮さでわたしたちの胸に伝わって
 くる。

ともあれ、平安教会はこうして東竹屋町耶
 蘇公会としてはじまり、新町第三公会となり
 明治二十年六月にいたって、第一公会員八十
 三名が第三公会に来ることになり、ここで事
 実上の合併現象がおこり、このときを期して
 「平安基督教会」という名に改められた。二
 十名で発足したのであったが、約十年後には
 会員合計百七十名となったことがその後の記
 録に記されている。この間、明治十八年一月
 十三日に、綱島佳吉がはじめて正牧師となっ
 た。仮牧師時代は終り、ここに第一代牧師が
 生まれたのである。そして、翌一月十四日、
 教会員の中村栄助氏ら二十名が第四公会を創
 立し、これが四条教会を経て、現在の京都教
 会へと発展したのである。第一、第二公会と
 の関係については研究を要するいくつかの問
 題があるようであるが、これについては機会
 を改めることにせざるを得ない。

現在の平安教会は京都の中心部ともいうべ
 き烏丸三条上る西側に立っている。その正面
 は烏丸通に面して東山に向き、はるかに新島

先生の墓所である若王子山をのぞんでいる。
 いま統計表にあらわれている平安教会員は約
 四百七十名である。しかし、九十二年のあい
 だにどこかに埋もれてしまった人々も少な
 らずあるはずである。そのような人々を探し
 求め再びおなじ信仰の交わりを形成したい。
 また、急激に変化していく現代の中で、平安
 教会が永遠に変わることのない福音の真理に立

平安教会歴代牧師年表

(敬称略)

仮牧師	第一代 本間 重慶 (明9・12 ~ 10・12)	第八代 永田 善治 (昭20・11 ~ 28・2)
	第二代 森田久萬人 (明10・12 ~ 12・6)	第九代 宇野 勇次 (昭30・1 ~ 42・3)
	第三代 山田 良斉 (明13・6 ~ 18・1)	代務牧師
正牧師	第一代 綱島 佳吉 (明18・1 ~ 19・6)	土居 真俊 (昭42・4 ~ 43・3)
	第二代 松山 高吉 (明20・11 ~ 24・9)	第十代 小野 一郎 (昭43・4 ~)
	第三代 不破唯次郎 (明25・1 ~ 28・6)	なお、教会の所在地は次のように変遷して いる。
	第四代 原田 助 (明29・2 ~ 21・6)	明治9年 東竹屋町にて創立。
	第五代 湯浅 吉郎 (明32・3 ~ 34・5)	10年 新町三条北入西側に移転。
	第六代 西尾幸太郎 (明35・1 ~ 大6・5)	大正5年 烏丸三条上る西側 (現在地)
	第七代 山口金作 (大7・8 ~ 昭20・11名 譽牧師となられる)	に移転。